

ならない、されないために



イラスト 金子真理

多く、若いころには受験戦争、社会に出れば出世争いと、常に競争にさらされてきた。また、仕事一筋で家庭を顧みなかつたため、いざ定年すると家に居場所がない。仕事人間なので趣味もなく、何をしたらいのかわからない。高度経済成長を支えてきたという強い自負やプライド、男尊女卑など画一的な価値観、そして孤独……。そうした特徴が、ストーカー行為を引き起こす一因にもなると考えられます」（福井さん）

ストーカー被害の相談に乗るNPO「ヒューマニティ」（東京都）理事長でカウンセラーの小早川明子さんも、「高齢者からストーカーされているとの相談は急増している」と話す。小早川さんがこれまで扱った事例は、加害者が男性のケースが多く、被害者は①30代や40代など年下の若い女

性②同じ地域の同年代の女性、の二つに大別される。

ます①について。

有名企業の役職に就く男

性(63)は独身で仕事一筋のモーレツ社員。ある日、部

下の女性(45)から「夫とう

まくいっていない」と相談された。食事などをしながら親身になつて聴いている

うちに、男性が恋心を抱くように。

その後、女性は夫との関係が修復。そのことを告げると、男性の態度が豹変した。

「離婚するんじやなかつた。『俺が今までやつてやつたことはなんだつたんだ!』」

今年6月に 朝日新聞で報道された事件

●長崎県の無職男性(68)が、わいせつな内容を書いたメモ用紙を自営業女性(78)宅の玄関ボストに入れたり、家の中に入れるように要求したりした。男性は被害女性が経営する店の客で、好意を抱いていた。

●福岡県の廃品回収業者の男性(70)が、元交際相手の23歳年下の女性に復縁を迫る電話を2週間の間に20回以上かけ、相談を受けた警察が警告したにもかかわらず、被害女性の自宅前で待ち伏せした。

●和歌山県の無職男性(85)が、奈良県の一人暮らしの女性(80)宅の留守番電話に何度も「家の前で待っているぞ」と吹き込み、会うことを要求。女性宅の敷地内にも侵入した。女性とは男の妻が入院していた際に同室で顔なじみに。男の妻は前年に死亡している。

族への不満やイライラ、不安などを口にするようになる」（小早川さん）

加害者は、「現役時代の自分＝過去の栄光」に自信とプライドを持っている反動で、今、自分が置かれている状況に強い被害者意識

の精神疾患」と指摘する。『自分がつきまとうのは相手のせい』という被害感情に基づき、『自分の良さを理解していない。理解すれば受け入れられる』と自己中心的に考え、歪んだ思い込みは周囲がいくら説得

会して話を聞き続けるうちに態度は変化するという。

やコンフレックスを抱いて
いるという。

女性ストーカー ほぼ同数存在

『症状』なのです』

しても正せない。完全に拒絶されると、被害感情が恨みに変わり、相手を苦しめることで自分の心の痛みを癒やそうとする。理屈ではいけないとわかつていても相手をもつと恨み、もつと不幸に陥れようと、感情をコントロールできなくなる。ストーカーは『恨みの中毒

「加害者危険度判定プログラム」を開発、昨年末に全国の警察に本格導入された。被害者が届け出る際に、加害者の人物像や被害者自身の性格や行動についてのチェック項目に、「よくあてはまる」「あてはまる」「あてはまらない」などの5段階で答え、そのデータを処理して、加害者の危険度を客観的に測定する。この結果は、裁判所での量刑や保釈金額などに影響を与える場合がある。

分は被害者である」との意識を明確に持ち、愛情や好意がないこと、電話やメール、つきまとい行為は迷惑で恐怖を感じていることを冷静かつきつぱりと本人に告げる。行為がエスカレートする前の、なるべく早い対応が必要だ。

今回は、恋愛感情のもつれから高齢者男性が女性に

ム」を開発、昨年末に全国の警察に本格導入された。被害者が届け出る際に、加害者の人物像や被害者自身の性格や行動についてのチエック項目に、「よくあてはまる」「あてはまる」などの5段階で答え、そのデータを処理して、加害者の危険度を客観的に判定するのが狙いだ。

最後にストーカー被害に遭わないと心がけを聞いた。

「平等に優しく接しているつもりでも、ストーカー行為に走る人にはそれが理解できない。相手が高齢者だと親切にしなければと思いつがちだが、特別な感情を抱かれていると感じたら、とにかく早い段階で『私はあなたのことを見ていなくてはならない』とハッキリ伝えて」（小早川さん）

ストーカー行為をされた場合、「自分にも責任があるかもしれない」と感情に流されるのではなく、「自

識を明確に持ち、愛情や好奇心がないこと、電話やメール、つきまとい行為は迷惑で恐怖を感じていることを告げる。行為がエスカレートする前の、なるべく早い段階で対応が必要だ。

今回は、恋愛感情のもつれから高齢者男性が女性に対するストーカー行為をした事例を取り上げたが、実は「女性ストーカーもほぼ同数存在します」と福井さん。被害者が男性の場合、警察に相談することが少なく、データとして表れにくいだけだとみる。さらに小早川さんはによると、何十年も前に離婚して縁が切れた子どもを、高齢になつてから追いかけ回す「親子ストーカー」の相談も、ここ数年増えているという。

誰もが、被害者にも、加害者にもなりうる——。高齢者ストーカーの事例は、現代社会の不安や孤独を映す鏡なのかもしれない。

ライター・中津海麻子

